

# 福岡

福祉活動専門員の

# ま な こ

社協活動前進のために

No.19 1984年6月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 ヒガシ印刷社



「サーブスする側が、サーブスを受ける側の刺激の全てを握っている。」

## 障害者の外出問題再び

宗像社協 内野英雄

「スターになれる障害者はいいなあ!!」

身障者自動車免許取得の適性検査で、不適格と判定された二十八才の重度障害者の女性の嘆きである。

「熊本のN子さんや松山のK子さんのように、自動車メーカーが私専用の車を作ってくれないかなあ……。でも、改造費用だけで百万円以上かかるといいうから、とてもじゃないけど……。」

が、参加された専門員の方々はどんな感想をいだかれたであろうか？

私個人は、河野講師の考え方に非常にショックを受け、研修会後落ち込んでしまった。

彼女は、脊椎破裂症で下半身不随、片腕も自由なため日常の外出には電動車イスを使っている。ただ、電動車イスでは行動範囲がどうしても限られるため、車の免許を取り、自分の行動範囲生活空間を広げようと自動車免許の適性検査を受けたのだが……。

研修会の企画の段階から携わっていたので、テーマに合わせて、ある程度の予備学習（制度的なものや、ミニ・ハンディキヤブ等の市民運動について）をしていたが、あくまでもその前提は「障害者にも外出権はある」であった。しかし、河野講師はその虚構を鋭く指摘され糾弾された。

昨年「障害者の外出にかかわる諸問題」をテーマに、専門員研修会が行なわれた

その一、障害者に「外出権」という権利がそもそもあるのか、〇〇権と言えば普遍的なものを作ります。従って、「外出権」という権利が障害者に存在するのかな？（そんな権利などありはしない）ない権利を保障することはできない。ない権利はつくりあげる

その二、障害者の外出及び自立を保障するための支援体制として、社協サイド（特に専門員）や支援ボラ側の自己決定がないことが問題を複雑化し、長期化させていること。

その三、外出の本質について、外出→行動すること→生産すること→文化を創ること→歴史をつくることだという理念化についてである。

その一については、指摘された事実にあ然とした。「権利があるのだから、それを当然保障しましょう」とする運動と、「ない権利を権利として創造する」運動とを比較すると、どちらが厳しくて困難なものか一目瞭然であろう。単に知識や経験不足が原因というのではなく、私の日常の社協活動の中にある安易な姿勢というものがある、考え方のものを安易な方向に向けているのか、と反省することしきりであった。

その二については、個々の障害者の問題にかかわるとき、避けては通れないものであるが、はたしてそれができるものかどうか……。

筑後市から出された事例の場

合など、今の私にはとうてい自己決定できないと思う。くやしいが、今の自分には一人の人間の生命を背負うだけの力量はない。又、宗像市社協としても、現在はそれだけの力量はない。

その三については、漠然とはわかっていたつもりであったがあらためて指摘されると、やはり運動における理念化の必要性を痛感させられた。

以上、研修会の私自身の反省を述べてきたが、いまだ落ち込んだ状態から完全に立ち直っていない。ただ、わかりきったことではあるが、「障害者問題」の基本的なものとしての「外出保障」については、今後とも取り組んでいきたい。

「サービスする側が、サービスを受ける側の刺激の全てを握っている。」と指摘された河野氏の言葉を肝に銘じて……。

最後に、冒頭の女性のことですが、彼女が不適格と判断されたのは、彼女にあう改造車が福岡県にはあるからだそうです。(大分県にはあるらしいのですが)

制度に人間を合わせるのではなく、人間に制度を合わせるようにならないのですかネ。

(宗像市社協 内野)

当町の障害児親の会が、全ての障害者が働く事のできる場を求め、簡易通所作業所設置運動を展開しはじめて、もう一年が過ぎようとしている。いや親の会が訴えてきた作業所が、ただ作業をするというだけではなく障害をもつ子ども達の幸せを願う親の会活動の拠点、集いの場でもあるという事から考えればこの運動は、親の会活動十年の歩みと共に地道に一步一步展開されてきたものといえる。

ここで作業所づくり運動が表面化してきたこの一年間をふりかえってみると……。

町議会に陳情書提出を行い、厚生委員会でも作業所見学などその取り組みが検討され、親の願いがかなって採択の通知を受けたわけであるが、責任が執行機関である福祉係に移ると、一歩も具体化しなかつたのである。

会としては、何度話し合いを重ねたところで、行政の「充分検討いたしましたよ」という美しい表現の裏に逃げの姿勢がめだつのに対して、ただ手をこまねいているだけでは解決につながる保障は全くないと判断し、町の行事を利用しバザーやコーラ販売などとして作業所の建設資金づくりと住民の作業所への理解

を積極的に呼びかけたのである。この事は、予想以上に効果があったといえる。というのは、第一に親の会々員の中でも、まだ養護学校や施設に入っている小さい子ども達の親は、作業所づくり運動へのかかわりも消極的であったが、これを機会に作業所づくりへの理解、親同志の横の連携が深まったこと。第二に

の上話をしてくれたりもした) 第三に、今までかかわりの少なかった施設の協力を得る事ができ、これからの活動の良き支援者となるだろう。第四に、我町で、ある組織団体が、ある目的の為に、この様な目に見えた活動をする事はあまりなかつたので、町長の目にとまったこと。(町長の作業所に対する関心は

**作業所設置運動で私がかんだもの**

**―連帯とは、扇動する者を必要としない―**

町社協 T・M

けたからこそ忘れてほしくない事がある。

それは、これが目新しい事として有頂点になるのではなく、「なぜ作業所が必要なのか」「なぜ作業所づくり運動を進めていくのか」この「なぜ」の部分に常にこだわっていく必要があるのではないか。また、この運動と並行して、自治体の「障害者特別枠職員採用」を要求する運動など、行政の責任を明確化していく必要もあるのではないかなど。

―私はこの運動にかかわってきて、ああ、何と社協とは無力であるのか、かかわりが深くなればなる程、口ばかりで自分では決して当事者になれない。傍観者なのか……と意気消沈する時がある。しかし、それでいいのかも知れないと思いつく時もある。

それにしても、親の会のたくましさは、作業所を求めている障害者とその家族を中心に、時には町議員や行政関係者をも巻き込んでだんだん力をつけ、行政をゆり動かすような勢いである。私は気づいた。

―連帯とは、扇動する者は必要ないのである―と。

(T・M)

# 交流教育？ うっそう！

大川市社協 永田 啓造

今や右も左も福祉教育という言葉が氾濫している。在宅福祉サービスと福祉教育が県社協の柱みたいにも聞こえる。

福祉教育の前身は以前、確かにあったはずだし、それを改めて福祉教育と銘うち、確立しなければならぬところに現状の問題（子供の教育があたりまえになされていかない）があるようである。暮らしの中であたりまえに学びとついていたものが、今やもてはやされ、大人の手でセッティングされている。

昨年ぐらいいからか、県社協設定の研修会や、連絡会で交流教育なるもの実践報告が数多くなされ、いかにもこれをやらなきゃ福祉教育じゃないよ、みたいに聞こえる。招く側と、招かれる側があつて、大人がふれあ

いの場を年に数回設定している。子供のいるべき行動を予測し、しむけているようにも思える。

障害を持った子はお客さんで、交流教育を学ぶ健常児の教育対象といった感がある。そこには子ども同志の生き生きとしたふれあいが本当にあるんだろうか。

将来、「まあ、かわいそう。私、健康な身体に生まれてよかったわ」とか、「あの子たちのことを考えたら、テストの点がよいとか悪いとか文句言えない。元気な子であれば、それでいいよ」とか言いだしそうである。

T君は、自閉的と言われる子どもで、校区の小学校へ通い、健常児クラスの中で学校生活のすべてを他の子どもたちと同じくすごしている。

彼の担任教師の話によると、「最近はおちつきがでてきてクラスにもとけこみ、言葉も豊かになって成長しましたよ」(彼の母親も同じことを言っている)

「他の子どもたちも、注意したり、よく世話をしますね。教室をとおびだしたら誰かが必ずついてきますし」「うちのクラスは、すべて平等で特別な配慮はしていません。でないと、他の子がT君だけいいなあ」と文句をいうものですから」といった具合で

ある。

このクラスは、大人のおしつけによる演出された交流などまったくない。T君はお客さんではなく、単なる「一人の手のかかる級友」なのである。

私は学校に対する指導性などはないし、アイディアもないので、交流教育など始めからする気もないが、統合教育は、障害児の教育面からとらえる場合が殆んどであるが、実は、交流教育以上に福祉性の強い教育のあり方と言えまいか、そもそも、福祉教育は、あんまり「ふくし」「ふくし」と言わないほうがいいんじゃないだろうか。不自然ですよ。



国際障害者年を機に、住民福祉講座の開催、車椅子の購入整備、手話講座の開催、盲人ガイド及び盲人の為の朗読ボランティアの組織化と、自分ながら障害者問題にはかなり取り組んできたつもりだった。

ところが昨年十一月の一泊二日の専門員研修会で「障害者の外出」をテーマの研修を続ける中で、町社協の事務局長をして専門員として如何に問題点が多く残されているかと痛感した次第である。

町内には重度身障施設「菊池園」があり八十人の園生を擁しその運営については素晴らしい努力が続けられているが、こと外出問題に関し、町として、社協として何を取り組んできたかと振り返ってみるとオンマツの一語につきる。地域の在宅障害児者の外出問題については小さい農山村であり、今のところ大きい問題をとまなっていないが

「障害者の外出」  
私の場合  
三輪町社協 北原 暁

現に施設の園生の外出問題や、今はなくとも将来における在宅障害児者の外出問題を考えるといろいろと手をうたねばならぬことが余りにも多いのに気付く。

手近なこととしては、ただ今建設中の住民センターの設備については、身障者用のスロープ（一階から二階へ）、トイレ等に気を配っているが、施設付近の道路面の構造への気配り、重度障害者に対する住民の対応を如何に啓蒙すべきか、など案件は限りない。

多くの若い専門員が、障害者の外出問題に取り組み、示唆に

富んだ成果を発表されたことは受講者として大きな指針を得た思いである。

今後半歩のスピードながら努力していきたい。

## 視覚障害者から

## 外出問題を考える

全盲の方々と、いっしょに柿狩りやりんご狩りへ行  
って話し合った貴重な声と、その声に対して感じたこ  
とを付け加えてみました。

去年のリンゴ狩りがとっても  
楽しかった。今年の柿狩りも、  
指折り数えてまっています。

私達は、自分達のやっている  
こと(例えば旅行)を他人もそ  
うしているという一種のあんど  
感、あたりまえ感に立って考え  
ているが、そうしなくともでき  
ない人が居るのだということ  
を痛感、そうできる自分の状態に  
感謝。

参加する(できる)ことは、  
多いに良い事です。全盲の友達  
をさそって、もっと楽しい行事  
にしては、又、自分達で考えた  
行事にしてはどうですか。

全盲の人は、旅行に行っても  
見えんから、何んにもなら  
ないだろうと思うかもしれない  
が、そうではない。その土地の  
風にあたるだけでも、ありがた  
い。又、ボランティアの人達と

一緒だとよく、「ワツ、あの花

きれい」とか「海が、まっ青」

とか言った後に「見えないのに

「ごめんね」と言われることがあ

ります。私達は「言ってもかま

いませんよ。大体、感で分りま

すから」と答えます。

覚えのあることです。「ごめ

んね」ではなくもつと、どんな

具合なのか詳しい説明をしてあ

げたいものです。又、見えても

見えなくても遠くへ行きたいと

思う気持ちは、いっしょです。

やさしさは心からです。

全盲の人はなぜ外出する必要

があるのかという人に対する答

えである。なぜ?、人間だから

・ふれあいがある・対象

者(いやなコトバかもしれない)

の呼吸が分ってくる。呼吸を合

せることもできるようになる。

ボランティアの方をお願いし

ます。私達(全盲の人)をツカ  
マエティツ下さるのではなく  
ツカマエサセ下さい。

「他人の身になって」がいか  
にむずかしいことかふれあ  
いを深めることよって克服せ  
るを得ないのでは!!。

行動に対しても正しい理解を  
大きな親切は、大きな迷惑に  
なることもあります。

やはり、外に出なけりやと思  
う。家に閉じ込めてはイカン!!

必要ですネ、外に出る喜び、  
他人と話せる喜び、狭い日常性  
から抜け出せた解放感。

重度の障害者でも自分から進  
んで外へ出かけようと努力して  
いるんです。もつと自分で努力  
をしては!!。

私達が、歩道上に車や荷物や

自転車や台その他の物が置いて  
あると非常に困る。あぶないし  
又、ツエで当ってぐるっと回  
ると方向感覚が分らなくなっ  
てしまうこともあります。歩道に

物をおかないでほしいですネ。  
歩道の段差は、車イスの人に  
は不便利かもしれませんが、全盲

の私達には、車道との区別にな  
り助かります。むろん、段差は  
ない方がよいですが、区別に盲

人ブロックを敷いてもいいので  
はないでしょうか。車に対して  
もトラックの場合、前からはパ

ンバーにあたるのでわかるので  
すが、後からだどツエが当らず  
額をケガしたこともあります。

私達は自分を中心に生活をま  
わしている。あたりまえだがそ  
の生活は「社会」生活など不可

能である。従って他人の中の自  
分という風に自分をとらえる必  
要がある。無知ほど

恐ろしいものはない  
知らないということ  
はどうしようもない。  
知る努力と知られる  
努力が併せて求られ

る。  
福祉に従さわって  
いる私達でも時々物  
を置いたりします。

NHKの鈴木さん

わくわくが大切では、又、  
障害者と一口で言ってもいろ  
んな部位の障害があり、車イス  
の人と全盲の人とは困っている  
ことは違うんです。福祉につ  
むずかしいものなんです。

親戚も大事であるが、近所づ  
きあいを大切にしたい。電話を  
かけてもらったり、その他いろ  
いろと、ふだんの面倒をみても  
らえるから・・・

地域の問題で、今、薄れてい  
る人情を回復し、どんな小さな  
事に対しても、お願いし、お願  
いされる様なつきあいがしたい  
ですネ!!。

一番身近かな外出は近所づき  
あいに始まる。近所づきあいか  
ら更に広がりある外出へとつな  
がる。近所づきあいをとばして

の外出は、気負いと不自然さを  
まぬがれぬ、なんとなく落ちつ  
かぬ気持ちは本当の幸せにはつ  
ながらぬ。近所の理解を得るこ  
とが定住生活の幸せの基である。

◎地域の情報を知らせること  
として大阪では、三分間テレホ  
ンサービスと言うものがある、  
ダイヤルをまわすと、住んで  
地域の情報が得られるそうです。  
各社協で考えては? (井・葛)

私達が、歩道上に車や荷物や

私達が、歩道上に車や荷物や

私達が、歩道上に車や荷物や

私達が、歩道上に車や荷物や



### 聴覚障害者から

## 外出問題／を考える

筑後市 井形 智幸

僕は耳がきこえない、口もきけないという聴覚障害者（ろうあ者）です。

社協の中山さんから「外出の問題について」を書くように頼まれ、早速に気軽に答えることが出来ません。だが、もう一度考えてみると、やはり聴覚障害者の立場といえますと、コミュニケーションの問題は当然と思

います。まして、他の障害者と比べてみて、まあ失礼だなーと思いつながりいいますと、特に視覚障害者の方には、外出は敵と思われま

す。聴覚障害者の方は逆に外出する機会が多いので、外出は適当といえるだろう。しかし、家中は敵があります。父と母と兄弟などの家族とのコミュニケーションを十分に

いけるわけではありませ

ん。そしてテレビを見ることもできません。しかし、画面を見て

ほしい内容が、聞こえないためか、内容はわからず、おもしろくない、退屈になってしま

る時、「何の話ですか」と言う

「今は大切な話だから、あとで教えてあげま

しょう」と言うだけで、話し合いの内容を詳しく知ら

されることがもなく、その結果だけを示されることが多く、そんな時、とても寂しく思

ったことがしばしばあります。しかし、僕の場合は、ろう学校卒業後、健常者とも生活で

生きていかなければならないという世界に飛び入ってもう13年になろうとして

います。ふり返ってみれば、やはり、僕

の持つ不便をまずカバーするのが必要があると今は思うようになったのです。

れば成立しないと僕は思います。また、コミュニケーションについては、まず心と心と通じ合うことが大事だと思います。職場にも家族にもそれぞれあり

ます。職場なら現在の会社にはいつてから10年になっております。特に先輩と初めて手話を使わずに全部筆談をして下さったおかげでやっと技術を覚えるようになり、現在、手話を覚えてほと

んど口と一緒に使っていたので、相手の心がわかるような気がして有難いです。しかし、機械

係の人と話しかける機会があまりないので、失敗したことがしばしばありました。機械係の人は部屋外なので、よく聞いて作る

心構えが大事だと思っております。僕が一番苦手なのは、やはり

理容に行くときです。理容師とゆつくり話すことが出来ません。いやに思うような気がすると、

ねたふりしたことがほとんどでした。言いたい事がありますが、文章の能力が貧しいので、それだけで終って

いただけで幸いと存じます。▼聴覚障害を持つ人たちにとつての外出問題は、単純に「外

に出ること」と捕えた場合には全く問題がないと思

います。しかし、いったん外に出て何かをしようとした場合には、

コミュニケーション（意思疎通）や、聞こえないことによる障害がた

くさんあるようです。文章を書いてくれた井形さん

（31歳）は、印刷会社に勤めている方で、現在、筑後市のろう協会の会長と、ちくご

手話の会の副会長をされています。印刷技術は、市内でも定評のあるところ

で、なかなか頭のいい方です。本人も最後に言われている通り文章を書くのが

二ガテということですが、これは全ての聴覚障害者の方に共通して

います。（中山）

### 老人クラブの指導育成。

■瀬高町社協  
○社協内に小委員会を設置する。①企画財政②事業計画

③調査・広報の各委員会。  
○重度障害者の作業所づくり

に取り組む。  
■高田町社協  
○社協専用の公用車（軽バン）

を購入し、活動の活発化を  
○自動血圧測定器を設置し、

住民の健康増進に資する。  
■大和町社協  
○12月9日、障害者の集いを

開催。当日の参加者は、障  
害者約70人、健常者約70人

講演会では、自身が足に障  
害を持つ松藤住男さん（65

才）が全国行脚での苦労や  
思い出話しを人生観をまじ

えて講義。  
○入浴サービス。  
■黒木町社協  
○住民福祉講座の開催。

○老人給食サービスの開始。  
■広川町社協  
○ボケ老人家族の会の結成と

悩みごと相談の場をつくる。  
■立花町社協  
○手話講習を昨年に引き続き

実施。住民福祉講座開催。  
○バス停に椅子の備付け（社

協予算で）

### 今年度の重点活動

#### ■三橋町社協

○ねたきり老人の家庭訪問と  
ひとりぐらし老人の食事サ

ービス。（年一回）  
○ねたきり老人の介護講習を  
昨年に引き続き実施。

■山川町社協  
○障害児親の会・若手母子家  
庭の指導育成。

○ねたきり、一人ぐらし老人  
への愛の一声運動について



養護学校小学部3年生の自閉症児B君が母親の手によって殺され、その母親も子どもの後を追ひ、自らの命を絶つた。

一九八四年一月十七日付の新聞で、その事実については、報道されている。

そこで、障害児殺し、母子心中を余儀なくしたその原因をさぐるべく、同級生A君(ダウン症児)の両親に取材を試みてみた。

A君の両親が私に提起してくれた課題は教育から就労まで、多岐に渡るものであった。

Q: B君の事件を知った時、何を一番に考えましたか?

父: ビックリしました。新聞をみながら他人事ではないと感じました。

母: もう少し頑張つて生きればよかつたのに……。

父: 困りの者がもつと付き合いがあればと思いました。

母: B君の家の近所は、勤めに出るお母さん達が多いので、話し相手がいなかったようです。

A君のお母さんも、やはりA君のことを色々考えておられたようです。早くから施設に入れた方がいいか、あるいは、ある程度の年齢になつて入れた方がいいかなどと考

えておられていたようです。私のところも一緒ですが……

Q: A君を施設に入れることができますか?

母: 一人っ子ですし、私にはできません……

Q: 近所の人たちは、A君に対してどうですか?

母: 私のところは仕事の関係で

子殺しの提起するもの

甘木社協 前田 正剛

今まで三回引越しをしました。引越す度に、新参者であるというごとと、加えてA

が一見して他の子とは違うというのがわかるので、子供達が物珍しそくに、わざわざ見に来ました。私は「Aは見せ物ではないんだ!!」と大声で

どなりつけてやりたい思いにしばしば駆られたものです。Q: 今はどうですか?

母: 企業内団地ということもあ

り、人の出入りも比較的少ないので、以前のようなことは今ではほとんどありません。Q: A君は、保育所には通っていますか?

父: いいえ、通っていません。可哀想でも一人ではだせません。

Q: 可哀想とはどういう意味ですか?

父: 親の目が届かない所でのいじめは時に悪質で残虐で、とても保育所にあずけるなんて

考えられませんでした。このように、私達の住む社会では、障害者に対する差別や偏見が渦まいていくという現実があり、しかもその現実を、親をして子を殺しめるほどに過酷であるということだ。

それでは、こういう問題に対して、どういう手立てを構想することが出来るのでしょうか。知恵おくれの子を持つ親たちが、我が子と共に外出し、そこ

で何かを得られる場所を身近かな所に作って行くという手立てを私たちは構想することが出来るはずだ。この手立ては、具体的には、共同作業所づくりであると考えます。しかしながら、就学後の行き場のなさをただ単に補完する場として、すなわち、養護学校の延長線として、共同作業所を無批判に肯定してしまうことにはやはり慎重でなければならぬはずだ。

共同作業所は、当事者の障害の受容を促し、障害者に対する差別や偏見を克服していくため当事者が自ら立ち上つていく地域の拠点として捉えるべきです。この事件は、単にある地域で起つたある事件ではなく、障害児とその親がおかれている社会的状況を象徴的に表わしている事件だと思います。すなわち、すべての市町村で起りうる事件であるということだ。

少数課題であるということ、問題が潜在化しているということ、この問題にかかわらないということは、積極的ではないにしろ私達は、障害児殺しを容認していることにはかならないはずだ。

おつ口希望者 七回

北野町社協 野瀬 光治

北野町社会福祉協議会は、昭和五十七年八月法人化になりました。私、専門員(野瀬)は社協へ入つてまだ日も浅く経験もなく未熟で、どんな事業から取り組んでいったらよいかわかりませんでした。そこでまず町内の六十五才以上のねたきり老人三十八名と、その介護者がどのような事で悩んでいるかを把握し、今後の取り組みの課題として調査を行いました。

集計してみると一番介護者が困まっているのが、入浴で調査対象者の半数を示めていました。北野町には、特別養護老人ホーム「宝生園」もあり、施設と協力しての入浴サービスを試み介護者の手助けになればと思ひ、再度希望の家庭を訪問調査したところ「はずかしい」と言われたり、「施設へ行つてまでも入浴しなくていい」と言われ、結局希望者なしでこのサービスは没になりました。今後の方針としては、簡易浴槽での入浴サービスを検討中です。

## 外出要因

### その積み重ねが大切

#### わが町の事例を通して

被害者の外出保障、障害者福祉の第一歩、しかし、この第一歩を阻害、困難にしている多くの要因がある。

物理的要因、人的要因、さらに障害者自身の問題など、しかしここではその究明はさておき、障害者の外出要因をつくり出している一つの事例を紹介したい。

那珂川町では、一昨年七月、障害者の社会参加、自立更生意欲の促進を目的に、町身障会による共同作業所が開設された。参加者は、今日までに数名の入れ替わりがあったが、現在、男性一名、女性六名の障害者が毎日元気に働いている。

参考までに、参加者の年齢、障害等を紹介すると、次のとおりである。

Aさん(55歳、じん臓障害一級)、Bさん(48歳、四肢関節障害二級)、Cさん(48歳、両下肢マヒ一級)、Dさん(27歳、聴覚障害二級)、Eさん(25歳、左上肘マヒ三級)、Fさん(25歳、療育手

帳B)、Gさん(23歳、肢体三級療育手帳B)。

なお、Aさんは男性、B、Cさんは車椅子が必要である。

この作業所での仕事は、主にカーテン、暗幕、ドン帳などの縫製加工作業で、暇な時には、ノレン、テーブルクロスなどを作り、障害(児)者作品展や町文化祭、産業祭りなどに出品、販売を行なっている。

勤務時間は、平日の九時から十七時まで、土曜日は午前中で公務員の勤務時間とまったく同じである。残業や日曜出勤もあ

る。配分金は、月ごとの収益金と助成金の一部を合算した額を、各人の作業能率、勤務日数、責任の度合い等によって配分される。平均すると、多い人で一日

当り二、二五〇円くらい、少ない人で四五〇円くらいで、参加者の多くは福祉年金と合わせても一般労働者の最低賃金に達しない。全員の合計が、簿給と嘆く専門員一人分にも満たない。

しかし、彼らの職場はいつも明るく、笑い声が絶えない。何もしゃべらないと思っていた人があいさつもし、よく笑うようになった。ミシンを使ったことがなかった人も、一年経った今日では大きな戦力である。職場を持った人たちの喜びや生きがい、手に取るように伝わってくる。

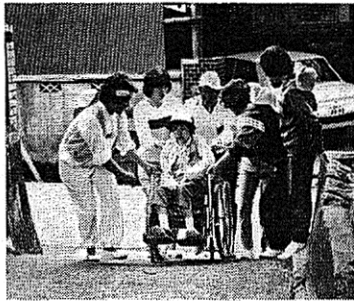
また昨年十一月、長崎で開催された身体障害者の九州大会には、全員が参加した。さらに、十二月の九電ビルで行なわれた「ふれあいコンサート」にも、みんなでお出かけた。

いずれも、彼らのほとんどが初めての経験だった。もしもこの作業所がなかったならば!!

ここに来る以前の生活を彼らに聞いてみた。

Eさん：家でテレビを見、お菓子を食するのが毎日の日課。外出なんてめったにしなかった。それに行くところもない。Fさん：家では、猫と犬の番。それに食事の準備、両親は屋外には一緒につれて行つてくれない。Gさん：ここに来る前は施設に居た。ここが出来たので家に帰って来た。施設に居た時は外には全然出なかった。Cさん：私は、幼ない時から足が不自由で、自分の足で歩くことは出来ないが、松葉杖と車椅子で何不自由なく外に出ることができた。かえって、私の方がいろんな所に行つていけるのではないでしょうか。特に学生時代には、まわりのみんなが支援してくれました。Cさんのような人もいるが、障害のため、彼らたちの外出を制限してきたものがいろいろ考えられると思う。その要因がある限り、私達はそれを取り除く努力を惜しんではならない。

しかし、それよりも彼らたちに、外出しなければならぬ積極的な要因をつくり出すことがより効果的で、その積み重ねがより重要ではないだろうかと思考するものである。



## 長門石通信 ④

### 今月の語録

社協の役員であることは恥ではない。恥であることは、長年在職(籍)しているのに役だつていないことに気づかないことである。

自己の給与より以上やった活動が住民に役だったと感じた時それを名譽という。悲しいことに、名譽は給与にあらわれてこないことである。

活動後の効果測定が自己の都合判定にとどまることは痛まな

いが、反省もなく相手のニードも把まず、同じ企画にとどまることは罪悪である。相手を誹謗することは得意でも、自分が注意されることに馬耳東風的人である人ほど、連帯を欠く者はない。総じて、女性に多いのは不思議である。

この様に、自己の反省を含め「あるべき人間関係像、社協像」を比喩的方法で凝縮表現を重ねてみるのも観察力がある。専門員は地域社会の動機にも、この視点が必要である。

(松)

連絡板

◆まなこ発行十周年

全国的にそれなりの評価を受けている本紙「まなこ」が、一九七四年四月第一号を発行以来今年でまる十年を迎えました。ひと口で十年と言ってもさまざまな紆余曲折があり、これまで担当された編集委員の苦勞は並々ならぬものがあつたことと思えます。

社協専門員と歩んできた「まなこ」を通して、社協活動の変化を感じることができるよう。さて、次号の第二十号は、「まなこ十周年の特集号」として計画が進んでおりますので、改めて一層の原稿協力をお願いいたします。

◆連絡会から市町村社協委員会

人間往来

このたび、次の町で専門員の移動がありました。退職された方々、長い間ご苦勞さまでした。また、新しく専門員として着任された方々には、一層のご活躍を期待します。

◆三橋町社協 (向森田 勲)

のメンバーへ

県社協の各種委員会の一つ「市町村社協委員会」に専門員連絡会から代表を送りこむことになりました。この委員会はこれまで市町村社協の会長、事務局長十名前後で組織されていましたが、今回から専門員とホームヘルパー連絡会代表が委員として参加し、より一層の社協強化を図っていこうというものです。今後の健闘を期待します。

◆病気に注意

最近、県社協も含め、市町村社協職員の方々のダウン情況が目立っています。昼の部か、あるいは夜の部の過重労働か、その点については個人差があり、言及することはできませんが、これから暑い夏に向けて、健康チェックが必要のようです。こんなことを書いている私も四年間健康診断を受けたことがあります。

◆立花町社協

(新)高果 修  
(旧)中村 正規  
(新)毛利 広之

◆黒木町社協

(旧)田中 正喜  
(新)木村 忠温

◆浮羽町社協

(新)宮崎 高義

◆苅田町社協

(新)福山 直樹

◆粕屋町社協

(新)箱田タツ子  
(新)井手 吉晴

◆上陽町社協

(新)中村 修

せん。

◆人事移動

県社協地域課で、主にボランティア関係を担当していた細山田晃さんが、六月十五日付で民生課に移動いたしました。後任としては、社協に入つて九年目のベテラン登本弘志さんが地域課主任として民生課から地域課に移動となり、ボランティア関係を担当することとなりました。

〈新米より一言〉

六月十五日付で地域課へ移動してきました。地域福祉は全く初めての新米ですが、よろしく願ひいたします。少し自己紹介しますと、昭和二十六年生まれの三十二才、妻子も一通りそろっています。県社協は九年目で、施設課で長年施設職員研修等を担当し、その後、民生課で一年余り経て地域課へ、県社協へ来た頃よりの念願だった地域課へこれ、非常に胸踊っている毎日です。名前が難かしいですが、覚えると忘れません。よろしく!!

登本弘志(のぼりもとひろし)

ハッピー・ライフ

◆結婚

女子短大の門のところに高級車を横づけして、かなりの若造

りをしてピチピチギヤルに声をかけつづけていた(?)とウワサの高い、大宰府市社協の緒方専門員が五月に結婚いたしました。心からお祝い申し上げます。(三月に結婚した藤田氏一言)結婚つて、耐えることなのネ!!

◆出産

県社協地域課係長、城野和男氏のところへ六月一日次男が誕生いたしました。名前は「智紀」君だそです。ちなみに扶養手当二、八〇〇円也生活難、未だ続く。(私も同じ)

映画(新規分)

◇県社協

「明日に生きる」(障害者)  
「先生と10人の子どもたち」(児童、地域)

◇田川市社協

「たぐさんの愛をありがとう」(ボランティア)

「ぼくにもできる」(ボランティア、非行)

図書案内

「地域福祉」

右田紀久恵、井岡 勉編

ミネルヴァ書房 二、二〇〇円

「いのちの優しさ」

高 史明著  
筑摩書房 一、二〇〇円

編集後記

「まなこ第19号」の発行が遅れたことに関し、深くお詫び申し上げます。

さて、この第19号ですが、第18号に引き続き、「障害者の外出問題」について、今度はいろいろな障害者の方の「外出」にスポットをあててみました。

「外出」における様々な課題が浮き彫りにされ、問題の深刻さがうかがえます。

それに対し、現在の社協側の認識や、取り組みはどうでしょうか。実際にその問題を抱える障害者に比し、その認識は低いというのが事実ではないでしょうか。

いずれにせよ、今後、この問題は、ますます広がっていくものと思われまます(障害者自身が積極的に「外に出る」ことに)

私たち社協マンは、この現実の「外出」問題に直面した時、どのようにこれに対応するのでしょうか。一人の障害者の問題として切り捨てていくのでしょうか、それとも……。

「外出」は、障害者にとって社会に参加できるかどうかの重要な課題です。(中山)